

## ティム・バートンが描くヴィクトリア朝： 『スウィーニー・トッド』における舞台美術と彩色

10L064 田辺 亜里沙

ここで取り上げる映画は*Sweeney Todd: The Demon Barber of Fleet Street*（『スウィーニー・トッドフリート街の悪魔の理髪師』）である。この映画は、2007年製作、監督Tim Burton, Warnerbros. Pictures, DreamWorks picturesの共同製作である。この映画のジャンルはThriller, Suspense, Musicalである。それに加えて、船乗りのAnthonyとToddの娘のJohannaが駆け落ちをするというストーリーも描かれているため、Love Storyにも入ると考える。この映画の原作は、1979年にStephen SondheimとHugh Wheelerが手掛けたミュージカル『スウィーニー・トッド』である。ミュージカルをそのまま映画化したので、劇中で歌われている歌はミュージカルと全く同じである。この映画を作成する際、作詞作曲のソンドハイムからの了承を得るまでに何年もかかった。

映画の舞台は19世紀のロンドン。主人公で理髪師のSweeney Todd(Benjamin Barker) が自分から妻子を奪い、無実の罪をさせたJudge Turpinに復讐をするという話である。私が興味を持ったのはこの映画における彩色である。初めてこの映画を観た時から、始めは背景が非常に暗いのに過去や未来の話に入るとカラフルで明るい映像になるので、彩色に関しては何か工夫をしていると思っていたので、監督であるバートンが細部にまでこだわったセットや映画全体の色について調べることにした。そこで私が設定したテーマは「映画スウィーニー・トッドにおける舞台美術と彩色」である。映画全体の色、セットの工夫と色、衣装デザインと色の3つについて調べた。

まず始めに、この映画監督と主演俳優の特徴について見てみよう。この映画の舞台美術と彩色を説明するには監督のティム・バートンがどのような人物で、彼の作る映画はどのようなものかを知らなくてはならない。監督のティム・バートンはゴシック、ホラー、ファンタジーなどのジャンルの映画が好きで、彼の作品にはそれらの映画が反映されている。『スウィーニー・トッド』にもゴシック、ホラーの要素が入っている。1999年公開の*Sleepy Hollow*（『スリーピー・ホロウ』）は彼の好きな映画の要素が大きく反映された映画であると考えられる。また、ディズニーアニメーション出身らしいユニークで少し変わったキャラクターや、非現実的な世界観の表現も彼の映画の特徴の一つである。

主人公にJohnny Deppを起用した作品は特にこれらの要素が色濃く出ていると言える。例えば、*Edward Scissor Hands*（『シザーハンズ』）や*Charlie And The Chocolate Factory*（『チャーリーとチョコレート工場』）はファンタジーとSFの要素があり、衣装が独創的である。バートンがホラー映画好きということもあり、彼の作品に登場するキャラクターは青白い顔をしていることが多い。ホラー映画ではない作品にも青白い顔のキャラクターが出てくるところにバートンの好みと、他の監督の作品には見られない彼の独特のユニークな面が出ている。また、*Corpse Bride/Tim Burton's Corpse Bride*（『ティム・バートンのコープスブライド』）は少しホラーの要素が入ったストップモーションアニメーション<sup>(註1)</sup>で、キャラクターの背が高く体が骨のように細いといったデフォルメされたキャラクターの体型は、バートンらしい描き方と言える。このように彼が監督をした映画は、他の映画には見ないような特徴のある作品が多いのである。また、Johnny Deppとバートンがタッグを組んだ映画は日本でも毎回

注目されている。デップとバートンは『シザーハンズ』の製作以来、公私共に仲が良く、お互いのことをよく理解しあい、信頼し合っている。お互いの思い浮かべたイメージが一致していたり、お互いの表現したいことをお互いが理解しているため、映画の作成が上手く進むことが多いようだ。例えば、*Alice In Wonderland* (『アリス・イン・ワンダーランド』)では、デップが演じるThe Mad Hatterのイメージのスケッチがほぼ同じイメージだったというのがある。故に彼らが協力して作り上げた映画のキャラクターはバートンのイメージを忠実に表現したものと言える。

そんな彼らが再びタッグを組んで作った映画、『スウィーニー・トッド』では、キャラクターはもちろん、衣装やセット、映画全体の彩色にバートンらしさと、彼のこだわりと工夫が出ている。まず、この映画の色については、映画全体の色が暗く、衣装やセットも彩色が抑えられている。この映画のストーリーは、15年前に無実の罪でロンドンを追放されたトッドがターピンへ復讐するため、理髪店を再開し、そこでターピンが店に来るまで理髪店の客の首を切って殺していく。そしてその死体は協力者のMrs. Lovettのパイ店でパイの中身をしているという、まるでホラー映画のような内容である。映画のイメージを観客に伝えやすくするため、映画全体の色がモノトーン調で暗くなっている。また、舞台設定が19世紀のヴィクトリア時代中期ロンドンである。この時代のロンドンは石炭を使って火を起こしていたので、その煙で常に空が暗かった。またこの頃は街で犯罪が起こる物騒な時代であった。しかし、トッドが家族と過ごした楽しかった過去の回想シーンや、ラベットが想像する明るい未来のシーンは、他のシーンとは違い、とても明るい彩色になっている。そうすることにより、暗くて怖いシーンと比較することができ、より一層そのシーンのイメージ、そしてキャラクターの心境が伝わりやすくなっている。

また、この映画の色彩において重要なのが血である。劇中に多く出てくる流血シーンでは、大量の血が流れる。人工的に作った血を使用しているが、その色はとても鮮やかな赤である。これは、セットや衣装、背景などがモノトーン調であるから、色が映える。また観客に印象付けるために、実際の血よりも格段に明るい鮮やかな赤色になっている。特に、映画のオープニングでは血の色鮮やかさがよく分かる。彩色については監督もこう言っている。「彩色についてはいろいろ試してみた。血の色は鮮やかな深紅色を選び、逆にセットや衣装は色を抑えて、アクセントカラーを一部にだけ使うだけにした。逆にフラッシュバックのシーンはスウィーニーの人生で楽しかったときのことだからカラフルにした。ミセス・ラベットのファンタジー [彼女が想像するトッドとの幸せな生活] も同じだ。つまり色をキャラクターの感情に基づいて使い分けたんだ。」(DVD特典映像より) このように、この映画は彩色にとってもこだわっているというのが分かる。そして、彩色はキャラクターの感情にリンクしていると言える。

次に、この映画は全てセットを組んで撮影している。このセットも全て彩度を抑えた彩色になっている。全てセットを組んでの撮影にした理由は、ミュージカルとして、現実感は乏しい方がいいというのと、あくまでフィクションであるというのを表現するためである。また、原作ミュージカルの題材にもなっている19世紀のイギリス大衆雑誌に掲載された、実在したかもしれない連続殺人鬼のスウィーニー・トッドの話を寓話的に扱うためである。しかし、このセットは監督とスタッフがこだわって造った。舞台になった実際のロンドンのフリート街へ行き、道幅などを採寸したり、そこから見える風景をスケッチしたりしてセットを造って組んである。現実感を乏しくしている反面、セットを実寸大で作ることで、リアルな街並みを表現している。これらのセットはデジタル加工で色を調節して彩度を抑えているが、元から彩色を抑えて造ってある。元から彩色を抑えることで、演じている役者たちや撮影している人たちが、映画がどのような世界観なのかという雰囲気をつかみやすく、演技しやすいというメリットがある。後から映像を加工するよりも効果的で、作品の世界観を確立しやすいというメリットもある。

最後に衣装についてである。衣装もほとんど彩色が抑えられていて、19世紀のイギリス庶民の衣装を

イメージしている。この時代は服の大量生産が始まり、誰でも既製品の服を着ることができたが、それでも買うことができなく、自分で作ったものや貴族が着ていた古着を着ている人も多かったようだ。だから、庶民と言っても服装はきちんとしていようだ。これら19世紀のイギリスの服装をベースに衣装が作られたのだが、バートンは毎回型にはまらないデザインを提案したり、いつもとは違う色合いを提案したりするので、衣装のデザインも個性的になっている。例えばトッドが理容室で来ている上着は、古いシーツを特殊な方法で染色して全て手縫いで作っており、古風な仕上がりにしてある。ラベットが映画の前半で着ているドレスは、ヴィクトリア時代のカーテンを使って作ってある。ラベットがまだ貧乏な時に着ているので、粗末な風合いにするためにカーテンを染め直している。物語の場面に合わせて衣装のデザインや色が違っているため、衣装からもシーンのイメージやキャラクターの感情を読み取ることができる。例えば、トッドが復讐に燃えている時は、トッドや周りのキャラクターの衣装も黒やグレーなどの色が多く、まだ貧乏なので少しぼろぼろにし、みすぼらしさを出している。また、トッドと家族の幸せだった過去とラベットが想像する明るい未来のシーンでは、カラフルで華やかなデザインの衣装になっていて、幸せそうで楽しそうなイメージが伝わってくる。

この映画において彩色はとても重要な要素である。周りの色やセットの色、衣装の色やデザインによってキャラクターの状態を表現している。それらの彩色がキャラクターの感情にリンクしているため、見ている人に映画のイメージやキャラクターの感情を伝えやすく、また感じ取ってもらいやすくなっている。セットの彩色に関しては、観客だけでなく、監督や役者も映画の世界観をつかんで撮影しやすく、演技しやすくなるというメリットがある。映画全体がモノトーン調であるため、この映画で大量に使用してある血と周りの色とのコントラストも極立つ。このようにこの映画の舞台美術と彩色に関しては多くの工夫が見られ、それらはティム・バートンのこだわりと彼が作る映画の特徴が出ている。

---

注1：静止している物体を少しずつ動かしながら1コマずつ撮影し、繋げることにより物体が動いているように見せる撮影方法で作ったアニメーション。

#### 参考ウェブサイト

「Yahoo!映画」 <http://info.movies.yahoo.co.jp/detail/typs/id7132/tm/> (1/15閲覧)

「goo映画」 <http://movie.goo.ne.jp/index.html> (1/16閲覧)

「衣服と装飾」 [http://www.hcn.zaq.ne.jp/caapa406/Basic/B\\_wear.htm](http://www.hcn.zaq.ne.jp/caapa406/Basic/B_wear.htm) (1/18閲覧)

「スウィーニー・トッドフリート街の悪魔の理髪師公式サイト」

<http://www.warnerbros.co.jp/sweeneytodd/> (1/19閲覧)

# Victorian Age According to Tim Burton: Stage Arts and Coloring in *Sweeney Todd* (2007)

10L064 Arisa Tanabe

Abstract: *Sweeney Todd: The Demon Barber of Fleet Street* is based on the musical *Sweeney Todd* written by Stephen Sondheim in 1979. This film was directed by Tim Burton in 2007 in U.S. This is classified into some genres such as thriller, suspense, and musical. This is a story about a barber named Sweeney Todd. He tries to retaliate on the Judge Turpin, who arrested him unjustly and took his wife and daughter away. The wonderful couple of Tim Burton and Johnny Depp work together in this film again, and their works always attracts their fans attention. This film is characterized by coloring, and it is one of the remarkable characteristics of Burton's works. Coloring is a very important element in this film. In this paper, how Tim Burton renovated the 19th-century British horror story will be discussed. First, we will see what is characteristic about the films of Tim Burton. Then we also see his favorite cast, Johnny Depp. Secondly, some scenes will be picked up to show his unique coloring, his strong interests in the stage setting and the costume. This film's coloring is link with character's feelings and represents the horrific scenes of the Victorian Age vividly.

(担当教員 杉村使乃)